

6 学習の成果としての児童生徒に「身に付いた資質・能力」について  
 学習成果として、「育てたい資質・能力」が児童生徒に身に付いたと思うか質問した。

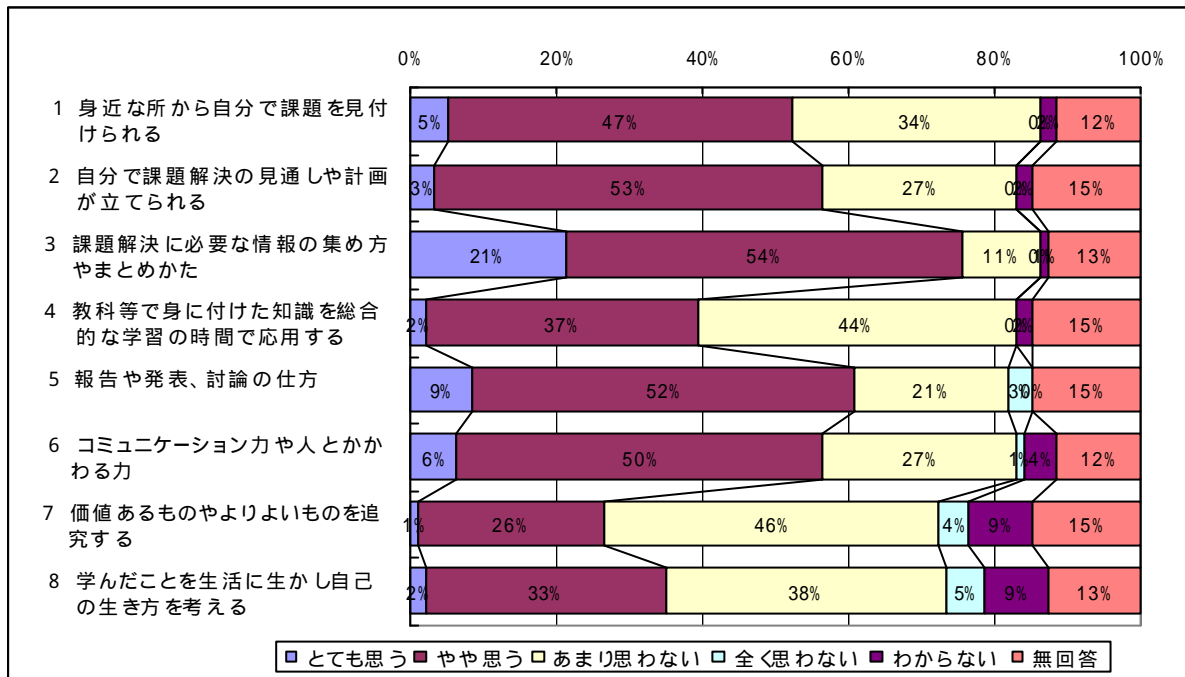


図7 「総合的な学習の時間」で育てたい資質・能力が児童に身に付いたと思うか（小学校）

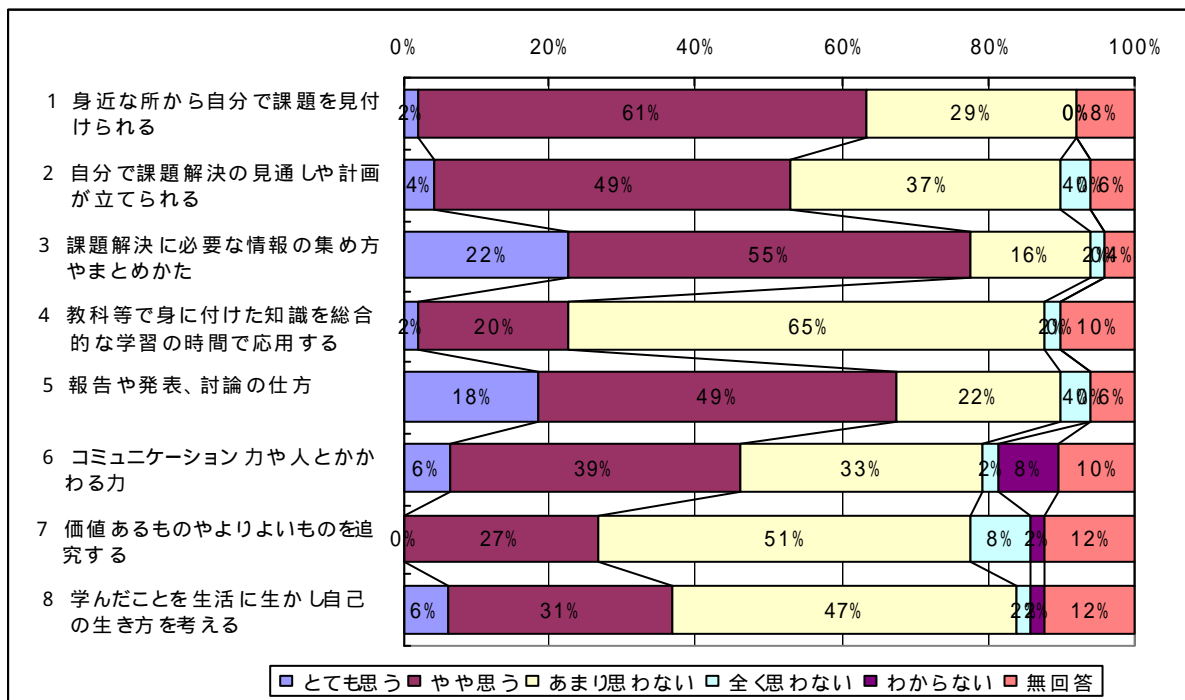


図8 「総合的な学習の時間」で育てたい資質・能力が生徒に身に付いたと思うか（中学校）

(1) 結果

「とても思う」「やや思う」を合わせた回答が60%を超えた項目は、「課題解決に必要な情報の集め方やまとめかた」(小75%、中77%)「報告や発表、討論の仕方」(小

61%、中67%)「身近なところから自分で課題を見付けられる」(中63%)であった。

一方、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の回答が多かった項目は、小・中学校とも「教科等で身に付けた知識を応用する」(小44%、中67%)「価値あるものやよりよいものを追究する」(小50%、中59%)「学んだことを生活に生かし自己の生き方を考える」(小43%、中49%)の資質や態度にかかわることであった。

## (2) 考察

「情報の集め方やまとめ方」は、育てたい資質・能力の設定でも割合が高く、児童生徒によく身に付いていると判断した教師が多いということから、効果的に指導が行われた様子がうかがえる。また、「総合的な学習の時間」では、発表会やプレゼンテーションが学習過程に組み込まれることが多く、こうした機会によって「報告や発表、討論の仕方」が着実に児童生徒に身に付いてきていることが分かる。

しかし、「知識を応用する」や「よりよいものを追究する」等の思考力や判断力、資質や態度は、すぐに身に付いて行動にあらわれるというものではなく、また、身に付いたかどうか見取るのもなかなか容易ではない。そのため、全体の傾向としては、身に付いているかどうか判断しにくかったものと思われる。